

近世末期『広八日記』の音韻表記

南奥方言資料の可能性

彦 坂 佳 宣

はじめに

『広八日記』は慶応二年から明治二年にかけ、「高野広八」なる人物が曲芸団を率いて米・欧に巡業した時の日誌である。彼の故郷は福島市から約一五キロはなれた現・伊達郡飯野町。飯野町史談会の翻刻（一九七七）の解説他によれば、文政五年（一八二二）大久保村（現・飯野町）の生まれ、四五歳の時に米人興行師リズリー、通訳ベンクツに率いられてこの巡業に出た。彼の経歴はよく分からないが、青年期に飯野を離れたと推定され、江戸に長くいたと思われる。この日記をしたためた旅行の直後に帰郷、十年程いたあと、その後の消息はたどれず、また十年弱して帰郷し、明治二三年に死去した。

私は二十余年余りに飯野町を訪問し、日記を拝見し撮影の機会を得た。その後、資料的な価値を計りかねていたが、先に「ある幕末庶民の米欧体験」（論究日本文学七八、二〇〇三年五月）でその概要を述べた。その稿では、サンフランシスコ到着までの旅程の模様、また米・欧で見聞した事柄とその表現について考えたのである。

本稿では、『広八日記』の方言資料としての面を考察する。そのうち、特に表記・音韻の様相を検討し、その結果、彼が出身地の南奥羽地方の方言をよく保持していたと推測し、この地域の方言の模様もあわせて考察する。

この日記については、安岡章太郎（一九八四）をはじめ、三原文（一九九〇）など、また宮永孝（一九九九）があるが、前稿と本稿はこの日記の言語的な面を考えてみるのである。本稿は原本の写真版をもとに考察をすすめた。

一、あて字、仮名遣いなど

まず、今日、高野家に保存されている資料の様態であるが、彼が旅行に持参した日記の帳面は縦一三・五センチ、横二〇センチの横長、あらかじめ糊付けで綴じられた大福帳様のものである。分厚い帳面の端がかなり磨り減つてめくれ、三年弱におよぶ異郷の長旅にずっと携行した痕跡がうかがえる。およそ七〇丁の約三分の二が記述部分であり、その初め四分の一ほどは比較的細かな字による一ページ一五、六行相当で書かれているが、途中から比較的大らかな文字づかいで一〇〜一一行ほどのととのつた紙面構成に変わる。あらかじめ旅程期間は契約で決まっていた模様であるが、最初ほどの程度のペースで書いていけばよいのか見計らいの時期があり、次第に旅になれるにしたがつて筆録の態度も定まってきたであろう。

さて、音韻資料としては、まず表記特徴について述べておく必要がある。

文体の骨格は候文の体裁をとるものの、これに混在して規範にとられない表記、自由闊達な筆遣いや単語、候文体に外れる文体要素が随所に見られる。

当時一般には珍しい外国旅行ということで、節用集などを持参することができなかった事情もあるが、彼の庶民的な教養に即した当て字、発音にもとづくと思われる仮名遣い、伝統的表記規範からの逸脱、また耳から聞いた外国語や地名の表記などが各所に見出せる。以下、引用例は原文のままとし、これに適宜句読点を付し、括弧内に理解のための注をくわえて示す。用例の所在は便宜的に飯野町史談会の翻刻の頁とした。

1、発音に即した仮名遣い

・助詞「を」「お」の表記

ぐんかん屋敷にてゆ八いおいたし、ちようれんにて役人いる。

68 / そのとき下口ぎん(ドル銀貨)やけくずれたるおほり出し、 49

・助詞「は」「わ」の表記

わたくしきわ(私儀は)がんひつ(眼病)ゆい(故)心をさため、 67

2、規範的仮名遣いからの逸脱、これは右の発音的な仮名遣いに通じる点がある。

・「ほ」「お」「ふ」「は」など八行・ア行音の通用

是にもおぶきなるもちい才(小さい)もあり、28 / のこりおぶく
わかれる23 / 異人のかる八ざを見物に参り7 / とうめかねにてよ
くくみるなり28 / 道とつりきれぬほとこの事なり、 45

・四つ仮名の通用

女異(女の異人)も五六人目ずらしけに36 / あくる日八四つ時ち
ふんまていてもかまいなし18 / あし八ふとくみちかし、27 / 此丸
八日記の日ぢつ(日時)の印上につけおく。2 / 黒かねにてふた

すじあり、是はせきたんおたきてま八る上き車(蒸気車)の道なり、6

3、漢字の文字使い

自在な文字使いの例にはこと欠かない。「髪」をほとんど「紙」と表記、同じく「如し」を「事し」、副詞「なかなか」を「仲ながよるの」とし、「者」を「座中の物もそれく二けいを致」などは多用され、「参る」を「すむ処いま入候」のように、さまざまである。

その典型的な一端を「様」「用」の字で紹介する。

全文からこの漢字を取り出すと、「様」は「さま」の訓読みで、接尾語として人名・役所・自然崇拜物に敬意を添える用法ばかりである。

・此夜日本殿様清水みんぶ様、此はりし(パリ)に長々きつそくあ
そはされ候いハ…26

・其時長州様の御家老様の御子様年十八才の人なり、此ろんどん
(ロンドン)ニ此時みならいに 52

・国王にまねかれ御城内ニまいり、王様の座敷ニとふり御目どふり
にてあり両(挨拶の「ハロー」)致、 17

・右御番所様江御願濟之上 1

・神様なき国なれハ、 5

・と中にて大神なり様にて馬車をやすめ、皆大雨にあい候。 31

これに対し「用」は、次のように多様である。

・規範的な漢語例 通用の金銀八異国言はんない国なり、しんちう
ニきんめつきおして、是通用のかねなり、 44

・地名の音仮名として 廿八日今日出立、朝四つ時よりくれ六つ迄
二人用達(ニューヨーク)い付候なり。(なお、「達」の使用法につい
ては不明) 19

・副詞 おぶきなる風船に人、用々十五人ほどより八のれす、今日

もめつらしき物を見ておとろき、 28

・助動詞ヨウ かし船(貸船)百はい程有、きはいかり用(借りよう)と申処、 36

・様態「様なり」の用法 なかく日本なれ八此用なるきれいなるとむらい、ちよう人百生(百姓)ごときに八できす、 48

このうち最多の例は、最後の様態を表す「」のよつに「」の意味の当て字の用法である。「様」は無く「よう」「よふ」の仮名例が数例あるが、他の三〇例以上は「用」によっている。これは簡略な字体で、自在というか、いい加減というか、便利さを優先させたと思われる。

また、全体に漢字の使用は比較的少なく、仮名は平仮名優先であり、カタカナ字体とみとめられるものは「イギリス」など数箇所に見られるだけ、外国地名も外来語も平仮名を主体とする表記がなされている。この時期、すでに幕府や各藩の遣米・欧使節があり、これらの記録には地名はカタカナか漢字表記が原則である。この点、『広八日記』にはかなり庶民的な側面が多い。

以上の状況を見ると、広八は規範を著しく外れた自由闊達な筆でこの日記を記していることがわかる。おそらく故郷での読み書きの学習は必要最小限のものであり、実社会での言語生活経験をとおしてこうした力をつけたのであろう。その文飾の少ない、平俗・率直な書きぶりからは、時として彼の声が聞こえてきそうである。

二、音韻特徴を表す可能性のある諸表記

次に彼の音声・音韻の特徴を示唆する表記について考える。現代方言の模様について、特に彼の故郷をふくむ南奥方言について記述のある加藤正信(一九七五)、飯豊毅一(一九七五)などを参考に、この日記

を分析してみよう。以下、現代の様子は両氏の記述に拠るところが多い。

1、格助詞「に」が「い」と表記される場合：約一四〇例

これは帰着点(方向も)などを表す格助詞「に」が「い」と表記されている例であり、きわめて多い。いくつか例をあげておく。

・(舞台席が満員となり)異人半ぶん八うちいかる。 45

・此日、入要達(ニューヨーク)いきたるなり。 24

・日本清水みんぶ様い願事有 72

一方、これを規範的に「に」で表記しているものも次のようにあるが、「い」表記例の方がはるかに多い。

・十七日今日方ちやしたい(マンチエスター)に立かいり、すぐに其日興行初日致候処、 42

・是よりいきり(イギリス)国にまいる事ときわまるなり。 37

しかし、場所や認定の「にて」、時の「に」などが「い」表記されることはない。その例は文語的な表現に目立つが、例外も多い。使いわけの基準がかなり曖昧である。

こうした「い」表記が多数をしめるのは、候文を志向しながらも彼の話し言葉が出てしまい、その発音そのままを表記した態度の現れである。

なお、右の中に格助詞「へ」「い」表記の場合もあると思われる。次のような例は動詞の性格からして、通常は格助詞「へ」が予想されるからである。

・これより利いす(フランスのリース)と申処いまる。 40

・長州御家老様の処いまりり右のしたい申上候、 54

これは、次の「へ」と表記されている例(わずか数例のみ)を参照すると、さらに可能性が強まる。

・廿三日今日明七つ時ニ、ひきやく船日本より三ふらんせしこ(サ
ンフランシスコ)へまいる船、三十丁ほとへたちて入ちかへ… 78
しかし、一般に格助詞「に」と「へ」は交代可能な場合が多く、そのど
ちらなのかの判定は難しい。

以上のような「い」表記の要因は、格助詞「ニ」「い」の場合なら
発音のゆるみ、同じく「へ」「い」の場合なら次に述べる母音工の
狭さに起因すると考えられる。

2、「い」類と「え」類の混同、あるいは「い」「へ」の統合化

次に自立語で「え(へ)」とあるべき箇所が「い」で表記される例を
みる。この例が多いためであろう。日記には「え」の仮名は現れない。
「系」は数例、それも語頭が「絵」など一音節自立語の表記にかたよる。
なお、付属語の場合は、ほとんど先の格助詞「へ」「い」と思われる
場合である。

自立語で最も多いのは、A自立語中「え」の期待される部分が「い」
と表記されているものである。反対にB「い」の期待される箇所が「へ」
となる例はわずかであり、さらにC期待どおり「え」(実情は「へ」)を
保つ例もわずかである。要するに、概して「え(へ)」が「い」に統合
されているのである。結論を先に言えば、これは東北弁一般に顕著な、
工の発音が狭くてイに近く、区別が微妙かあるいは統合されているかの
様相を示しているものと考えられる。

以下にこの三つの類の例をいくつか示しておく。

A、通常の語形なら「え」である部分が「い」と表記されている例…き
わめて多数

- ・ 山島すこしも見^いす、うすくらき田なり。 74
- ・ 此女にあらずと申てかいせ共、(返せ) 54
- ・ むこふひとめにみおろしひかいたり、(控えたり) 54

・ 両か八い言だんに言人つゝひかいたり、是八口がきお取用なる役
もあり、 54

・ まちがいなしと八思^い共、(これは、唯一「い」でなく「ひ」による
例) 54

・ とこまでもつよくかけあいとゆ八れて(掛け合えと) 54

・ 日本人あれみたまいと申て 11
最後の二例は命令形の語尾「え」(現実には「へ」文字使用が想定される)
が「い」表記の例である。

また、例は少ないが母音だけでなく子音をまじえて「け」の期待され
るところに「き」が現れる次のような例もこの部類であろう。

・ 大さわきと相成、まハリの役人かけつき(かけつけ)候い共し
まず 45

また、形式名詞「故」は候文体の中で理由をあらわす頻用語であり五
〇例余り使用されるが、すべて「ゆい」と「い」表記である。

B、自立語のうち「い」「ゑ」「ナシ」が「え・へ」となる例…やや多数

- ・ 右やけくすのかね、きんざいもちまへり、(参り) 50
- ・ それ二付申あけるしたへあり此義八、(次第) 54
- ・ 三十丁ほとへたちて入ちかへとふる、(入れ違い) 79
- ・ 皆々にてはかしよいまへり、是おなごりのはかまへり二日共致な
り 59
- ・ ろんとんちうのふたへ(舞台)たすね候い共、此せすあきなしせ
ひなくやとやにて皆休候。 37

なお、次の「覚々」を「思い思い」の当て字とすれば、もう一例増える
が、原文のままでも意味が通じるので参考までにとどめておく。

・ なり物又ハておどり、皆覚^い々のけいを致、たかひによるこひ候な
り 15

B類の例は、Aに比べて少ない。

C、自立語で期待どおり「え」(実質的には「へ」を保つ例：4例

・是より又上き船にのりかへる。 77

・座敷八皆式間二三間ほどの作にして、たとへ百つほあり候ても、

皆座敷く二黒かねにておやゆびほどの丸み二致、なか八うつ八

にしてあかりのいきのかよふ道なり(ガス灯設備の説明) 6

・なを又役人申用、しからバ、しようぞくなにしまにて、かぶりし

物八どのよふなる物又年かつこう、かおのいるよくかきあける用

と申わたされ、へんくつ(人名・通訳を主とする者)したへ(下絵)

皆かきあけ候なり53

・申上候へ八、役人もかんち入たま、 52

以上によれば、やはり相当な「い」への偏重傾向が見えることになる。

この偏重を認めたくうえで、上のA対B Cの類にはやや対立的な模様が
見られる。それは問題の「い」「へ」の直前に位置する母音の差である。
その分布は次のようになる。

		A類	イ
		B類	エ
		C類	ア
			オ
			ウ
0	0	23	
0	0	0	
3	8	77	
1	0	14	
0	0	83	
		(うち「故」54)	

* 除外例 4例
語頭に位置するもの除外：1例「いんてん」(炎天) / 「べし」への接続形がゆれていて確定しがたいもの：「たといべき」の1例・先引、「かけつき候いども」1例 / 先述「覚々」1例

表によれば、A類「え」「い」の母音はアが多いものの他もあるのに対し、「へ」を持つB・C類はア音に集中しオもある。仮にウ母音の数を押し上げている頻用語「故」を除いてもこの傾向は変わらない。また、自立語一般における各母音の出現度の差を考慮しても有意的な分布ではないかと思う。その意味は、一般に工音が狭くイに近いことを前提として、その中で口の開きが大きいア・オ母音に後続する場合、やや

広い発音の工になりやすかったものと考えられる。この点で、右の分布模様は広八のそうした発音機構の機微を反映しているものと考えられる。

次の例は、こうした工の狭さが極端に進み、イの聞こえまで無意識に落としたものである。「ゆい(故)」の「い」脱落と考えられる例である。

・此処の物八とくありけれ八たべるなど申候、それゆにみだばかり

に御座候也。 10

3、語中語尾のカ・タ行子音の有声化

日記には「はぐらんかい」が「はぐらんかい」となるような、語中尾のカ・タ行子音の有声化の表記が極めて多い。異なり語にして三〇例強、延べにして五〇例ほどある。品詞のつえでも次のように広い範囲に及んでいる。

漢語(異なり語で5例)

・はぐらんかいを見物二まいり 33

・ふだ(舞台)もちいさいなり。 41

和語(異なり語で20例強)

・まるだ(丸太)をならべてゑんと致 11

・あまたの異人よろこび(喜び)ておつちて

地名：1例、御いんし、よこ浜(横浜)御番所様にて取おさめ、 81

助詞：1例、中よきだいはを興行致事とき八まり、 13

助動詞：1例、ゆいにみだばかりに御座候也。 10

接尾語：1例、福べの二つに致し、しりのかたちなり、 28

濁点のない通常表記の総数は把握していないが、右の例からみて相当な有声化現象があったものと判断できる。この中で音環境に特有のものがあるのかどうかのことも知りたいが、これは未考である。

この有声化も東北方言に顕著に見られる事象であることは言つまでもない。

また、有声化は、次のような一見すると無関連と思われる場合にも潜在している。

まず通常「つ」の仮名が期待される語形を「す」とするものが九例、それも多様な語にみられることである。

- ・ 皆々おくりに出、にぎわか(賑やか)にして此処をたす(発つ) 60
- ・ 猶又われもあかりて(参上して)、せすく御ちそふに相成おり候
ゆい、52(節々)、あるいは「切々」か)
- ・ 此せすあぎなし、せひなくやとやにて皆休候(この節、空きなし)

37

いくすなり共、すきほとつけおき、(幾つなりとも) 6

まつくるに、よりあすまり、(寄り集まり) 31

あすまりて、日本人めつらしけにいろく「ちそふに成、

(集まりて) 15

道工をあすらい、其夜異国のしはい見物にまいり候なり。(道

具を誂え) 6

・ 此せす八御奉行御見分のついで、どんたく三つとんたくとか、

(この節) 62

・ のこりし九人、き国のせす御いんし共に江戸おもてにおくるなり

と申わたされ、(帰国の節) 81

これらの例はいろいろ解釈の可能性があると思うが、語中尾の「つ」の有声化した「づ」「ず」の仮名で書かれた、また「す」とあるのは濁点を加えなかった表記、という解釈が妥当と思われる。いわゆる「じい・ぢい・づ・ず」の四つ仮名はこの時期、日本の広い地域で混乱し、広八の場合もそうである。その事例は前節の表記のところで示した。

次のような例はこの考え方を立証するものであろう。

- ・ 三日此処八ちいさき処なり、やすくり(屋作り)はよけれとも、
- ・ 是いなかの町家にて候ゆい、ふだい(舞台)もちいさいなり。

41

これは「家づくり」と考えられ、それが「す」の仮名で書かれている。また、次の場合も、

- ・ われくの船にはいり、又女異(女性の異人らも)も五六人目すらしけ(珍しげ)にてのりうずり、(乗り移り)……36
- ・ ゆつほ(湯壺=バスタブ)のわきに水・ゆ(湯)てる口有、あずくもぬるくも(熱くも温くも)われすきのよふに、ゆのなかにいて

できる事なり、 12

最後の例をとると、「あつく」「あづく」「あづく」(有声化)「ず」による「あずく」といった経緯によると考えられる。

別の解釈としては、直接に「つ」の音価が「す」のそれに近いことも考えられるが、現実的ではないように思つた。

つまり、以上の例も、語中尾の力・タ行子音の有声化を語るものと考えられよう。

4、ズーズー弁的兆候の検討

いわゆるズーズー弁は、東北地方に顕著であり、特に北奥方言に強いとされる。その典型はシとス、チとツの混同である。こうした点はどうであろうか。

日記でいくらか見られるのが、「し」「す」の表記である。以下その全例を示す。

- ・ こふしのあいたより火ころげ出て、したにすいたるふらんけに火
- つきて 48
- ・ 両か八き間半八石にてつめもたゝぬすき石、又中八三間馬車の道

なり、 56
 ・ 両川三間八すき石にてつめもたゝぬすきずめ、 6
 これらはみな「敷く」の例であり、ひとまず語彙的なものとするべきか。

「ち」と「つ」の交代もわずかに次の例があるにすぎない。
 ・ ぞふ大けた物小けた物、又酉・わし・くまたか・みみちく(ミミツク)・大む・なのしれなき酉けた物す万(数万)か)なれ八かずわか
 らず、 22

他の表記は通常期待するとおりの表記になっている。

このように見るとあまりズーズー弁的な特徴は強くないとすべきである。

同じく1例ながら、次のような例がある。

・ 三り程へたして(三里ほど隔ちて)、当めかね(遠眼鏡)二てよくく／＼みる 11

これは「隔ちて」の例である。東部方言なら促音便形「へだって」が予想されるが、この文語的表現は「ろんどん(ロンドン)より道十三里(里)ほとへたちて」(11頁)など同形が3例あつて確かである。そして、この交代は、どう見ても「ち」と「し」の音価の似かよいを考えざるを得ない。その要因としては、頭子音の類似(ここでは「ち」側の破裂性の弱化が考えられるが、加えてイ・ウ音の中舌的な発音も関与しているのではないかと思う)。

次に参考的なものであるが、外国地名の表記でこれに関連する可能性のある例が見える。

日記には外国地名が多数あらわれる。そのうち都市名「サンフランシスコ」は6例あるが、全て「三ふらんせしこ」の表記であり、今日のよくな「サンフランシスコ」の「シス」部分が、日記では全て「せし」表

記となっている。また、フランスのパリは「はりし」「はりす」の両例が見られる(「はりし」は翻刻にあるような「パリ市」の意味ではないと考えられる)。

・ 此時ふらんすはりしに右はくらんかいがあたり、かたき物はいしけり、是八なん共たといべきようなし、 27

・ 廿四日朝九つ時二、ふらんすの国はごと申ふなつきいあかり、それより上き車(蒸気車)にて、七つ時二国のみやこはりすと申処
 いまいり、 26

「サンフランシスコ」「も「パリ」も、原音が日本人にはとらえにくい音であり、それを今日と異なる形式(「サンフランシスコ」の場合)やゆれ(「パリ」の場合)のある仮名で記したことも故なしとしない。

しかし、また、シとスの間での交換が認められる点では、何かやはり軽いズーズー弁的な兆候が認められるように思う。それは、イとウの発音の類似、つまり中舌的なそれがあるからではないか。

この点が認められるとするなら、どうも広八は北奥方言ほどのズーズー弁ではないものの、中舌的発音の持ち主であった可能性が高い。

参考になるのは、仙台藩士・玉虫左太夫『航米日録』(いま、仙台市立図書館蔵の自筆本部分による)でも、「サンフランシスコ」もわずかにある中に、大部分が広八の場合と同じく「サンフランシスコ」の表記がなされている点である。

加えて、詳細に検討すると、

・ 梅樹ヲ見ル。今已ニ実ヲ結ヒ我国ニ異ラス。是定メテ他ヨリ移ス
 来ルナラン(巻五「草木」項)

・ 大ニ心配スケルガ午後二至リマツヤレス州ヲ過キタリ由、一先ツ安心ナレト…(巻七・9月7日条)

などズーズー弁的な兆候を見せる表記がままある。この点から「サンフ

ランスシコ」の表記をみると、やはり玉虫のシとスの発音に起因すると考えられる。

玉虫は万延元年の遣米使節団に従った者、その記録であるこの日録の詳細な記述は高い評価が与えられている。一方で、この時の副使・村垣淡路守範正による『遣米使日記』では「サンフランシスコ」、同じく、正使・新見豊前守正興の従臣、柳川東當清『海航（航海）日記』でも「サンフランシスコ」であり、当時こつした表記がすでに通常のものであったと思われる（以上は『遣外使節日記纂輯一、日本史籍協会叢書による』）。それを玉虫はスとシとを逆にして表記している。そして、広八も同じである。

これはやはり両者のズーズー弁的兆候の表れではないか。そして、広八の文体・表記の乱れにしてこの程度のズーズー弁的兆候しかないのに対し、玉虫は学識を持ち文体的にも乱れを見せない筆記態度でもこれだけ現れるのも注目されることであろう。

希望的観測ではあるが、今日のズーズー弁は北奥方言に強く、南奥方言では弱い。しかし、南奥方言に属する仙台でも見られていて、これがさらに南に下った福島県ではかなり弱まり、中舌的な発音は保有しながらもイとス、チとツの区別は基本的にあるとされている。玉虫と広八の以上のような差は、わずかな例からの推測ではあるが、こつした南奥方言での地域差を反映しているのかも知れない。この点は、なお考えたい。

5、拗音の問題

シユとシ類の混同もこの地域の特色とされるが、次のように見られる。

- ・ あめりかぎの天しどつ（天主教） 16
- ・ 此うちの女郎し（衆）にいたりやと申て 36

・ ていし（亭主）もわれをわるく思ひ、 52

・ よき処にてさんごち（珊瑚樹）のやすき処、すこしかうなり。 65

ビユとビヨの多くの例は次のように規範になかった表記であるが、

・ 松井菊治郎ひようき（病氣）に相成候、
わずかに次のような例もある。

・ わたぐしきわ（私儀は）がんにう（眼病）ゆい心をさため、 67
いわゆるユウとヨウ韻の交代例である。

拗音同士の交代もある。

・ 小上き車ありて二十間さしわたしほどに道まるく作…、又もく馬ひとりにてあるくしかけの馬なり、車るい（種類）八いろくかすたくさん有、是めつらしき処なり。

以上は、第一に拗音の問題であるが、その下に母音の音価も関与しているかもしれない。この拗音の問題も今日の南奥方言でまみ見られることである。

類似の事柄かと思うが、イとユの混同例もまみ見られる。

イとユの混同例

・ 町家にてよろこひゆはい致なり、 67

・ 目出度ゆわい申候なり。 41

・ 上き車道大ゆ八（岩）あり、きりほどの場しよをきりぬぎ、なかを石にてまるくつみあけ、 22

こつした混同も南奥方言の特徴とされている。

6、長音の短呼、その他

・ それよりほつくこきまし（まーし）の長音の短呼ではないか 36

・ はこへ入をき、しゆい（周囲力）まはり八やけ候てもなか八やけのこり、 50

・ なのしれなき酉けた物す万（数万）なれ八かずわからず、 22

- ・今日処のさいれ(祭礼)にて、中夜共二大人にて相勤申候。 63
- ・大きにひよはん(評判)よろしく此処相勤申候。 42

これも東北方言によく見られる特徴といわれている。

7、「に」「ん」

- ・なんぶん(何分)あるく二も又かい物致候共つくく事かなわず、 31

これらは南奥方言的特長とは言えないようであるが、彼の発音をどうめたところがある。

8、合拗音

注目されるのは、いくらが見られる合拗音に関する事象である。これがかかり守られている。彼の自由な表記特徴からすれば、やや不思議な感じがする。

- ・すくくわちば(火事場)いまいり候なり。 13
- ・皆々しんくわい(心外)に思ひ大けんくわと相成候、 45
- ・はりしぢづい(パリ中に)くわい状(回状)をまハす也、 27
- ・是も大きなるはんくわ(繁華)のちなり。 69
- ・梅吉けかせんくわい(全快)致、 24

これは、「博覧会」の例を除いて、全て規範的な合拗音の表記である。「博覧会」は接近する箇所延べ5回現れて、その全てが非合拗音表記をとってそれなりに安定している。このことをどう考えるか未解決であるが、これまで述べてきたように広八の表記が自在であり発音そのままに近いことを考えると、彼の中に合拗音と直音との内在的区別がかなりあったのではないかと推測される。

しかし、そう言うには彼の成長した飯野付近の様子、また長くすこした江戸語の様相を検討する必要がある。合拗音をめぐるこうした点の検討は別稿としたい。

おわりに

以上、『広八日記』の表記の特徴を示し、候文をめざしながらかなり規範から外れる文体や表記のあること、その自在の中に彼の発音特徴を知る手がかりのあることを述べた。こうした点から表記を検討すると、イとエの交代例からはエが狭くイに近いこと、語中語尾の力・夕行子音の有声化がみられること、ズーズー弁的特長は強くないものの窺え、イ・ウ母音などは中舌的ではなかったが、拗音と直音の交代、長音の短呼などのあったことが推測され、今日の南奥方言的特徴と一致する点がおおいことを見た。さらに検討を要するが、合拗音の保持などの兆候も見られた。恐らく広八は成人後も、また江戸においてもかなり故郷の方言を保持していたことが推測されるのである。

しかし、広八は江戸での生活が長かったと思われて、江戸語からの影響も考える必要がある。これらの点については今後の課題である。

付記 引用例は原文のままとし、これに適宜句読点を付し、括弧内に理解のための注をくわえた。用例は原表記によったが、その所在は便宜的に飯野町史談会の翻刻の頁とした。

参考文献

- 飯野町史談会(一九七七)『広八日記 幕末の曲芸団海外巡業記録』
- 加藤正信(一九七五)『方言の音声とアクセント』『標準語と方言』筑摩書房
- 飯豊毅一(一九七五)『東北部と関東の方言』『標準語と方言』筑摩書房
- 彦坂佳宣(二〇〇三)『ある幕末庶民の米欧体験』『広八日記』の世界とこゝとば』『論究日本文学七八』

三原 文（一九九〇）「軽業師の倫敦興行」『芸能史研究』一〇

宮永 孝（一九九九）『海を渡った幕末の曲芸団』中公新書

安岡章太郎（一九八四）『大世紀末サーカス』朝日新聞社

謝辞

『広八日記』については、飯野町の高野家、同教育委員会のご教示を
いただいた。

本稿は立命館大学学術研究助成による成果の一部である。

（本学文学部教授）